NEWS LETTER
リーブラ
LIBRA
No.83
2025.3
公益財団法人　東海ジェンダー研究所
TFGS THE TOKAI FOUNDATION FOR GENDER STUDIES

ガラスの天井にひび割れ
～女性外科医たちの挑戦～

大阪医科薬科大学一般・消化器外科助教
消化器外科女性医師の活躍を応援する会会長　河野 恵美子

十分な素質や実績があっても、女性やマイノリティが一定の職位以上に昇進することを妨げる組織内の障壁を「ガラスの天井」と呼ぶ。この表現は、1978年にアメリカの企業コンサルタントであるマリリン・ローデン(Marilyn Loden)が初めて使用したとされている。この現象は多くの分野で見られ、外科も例外ではない。キャリアを重ねて、指導的地位に就くことは容易ではなく、日本消化器外科学会施設認定代表者1003名中、女性はわずか8名（0.8%）に過ぎない。女性が指導的地位に就けない要因は多岐にわたるが、われわれは手術執刀機会と手術短期成績に着目し、日本の手術の95%が登録されているNational Clinical Database（NCD）を用いて男女間の差異を解析した。

消化器外科における代表的な6術式（胆嚢摘出術・虫垂切除術・幽門側胃切除術・結腸右半切除術・低位前方切除術・膵頭十二指腸切除術）における外科医1人あたりの執刀数を男女間で比較したところ、いずれの術式も女性は男性より執刀数が少ないことが明らかになった。特に手術難易度が高いほど格差は顕著であり、経験年数の増加とともに拡大する傾向が見られた[1]。手術の短期成績については、幽門側胃切除術・胃全摘術・低位前方切除術の3術式を解析した結果、いずれの術式も男女間で成績に差はなかった。また、女性は最新技術である腹腔鏡手術の執刀機会が少なく、よりリスクの高い患者を担当していることも明らかになった[2]。これらの論文は、世界的に権威のある医学雑誌であるJAMASurgeryとBMJに掲載された。

2つのNCDジェンダー論文を踏まえ、日本消化器外科学会は、2022年8月9日に「女性消化器外科医の手術修練に関する周知依頼」、同年11月25日にも「女性消化器外科医の執刀症例における公平性の担保について」というタイトルで声明文を発表した。

さらに第77回日本消化器外科学会総会において、特別企画「不可視化されたジェンダーバイアスを明らかにする～消化器外科領域の男女共同参画の真の実現に向けて～」（2023年7月14日）を開催し、以下の宣言（函館宣言）を発出した。

1）消化器外科医としての男女の均等な活躍を支援します。
2）男女の均等な活躍を達成するために、大規模データベースを用い、定期的に男女の消化器外科医の手術執刀数を検証します。
3）2032年までに消化器外科中難度手術執刀数の男女差をなくし、引き続き高難度手術執刀においても機会均等をめざします。
4）消化器外科における多様な視点が生み出す未来を信じ、真のダイバーシティの実現に向けて会員の意識改革に努めます。会員一人ひとりが、ライフイベントに合わせて希望するキャリアを達成できるよう支援します。

日本消化器外科学会は、2016年までに評議員を務めた女性はわずか2名しかおらず、初めて女性理事が誕生したのが2022年という、男性中心の社会である。しかし、今回われわれは、女性が指導的地位に就けない理由が能力の差ではなく、機会の差であることを数字で証明することで、ガラスの天井にわずかなひびを入れることができた。近年、女性の数は増加しており、30歳未満の割合は20%に達している。後に続く人たちが、これからもガラスの天井にひびを入れ続け、いずれ打ち破ってくれることを願っている。できれば、その瞬間をこの目で見届けたい。

1）Kono E, Isozumi U, Nomura S, et al. Surgical Experience Disparity Between Male and Female Surgeons in Japan. *JAMA Surg.* 2022 Sep 1; 157(9). doi: 10.1001/jamasurg.2022.2938.
2）Okoshi K,Endo H, Nomura S, Kono E, et al.. A comparison of short-term surgical outcomes of male and female gastrointestinal surgeons in Japan: retrospective cohort study. *BMJ.* 2022 Sep 28. doi: 10.1136/bmj-2022-070568.

チェコ共和国におけるジェンダー研究の進展

村瀬　泰菜（東京大学大学院総合文化研究科 博士課程）

チェコでジェンダー研究やフェミニズムが日の目を見るようになるのは、1989 年の社会主義政権の崩壊を待たねばならなかった。フェミニズムや女性団体は、共産党政権に敵対しうるブルジョワ的イデオロギーだと見なされていたためである。共産党政権下では、政府公認のチェコスロバキア女性連盟を除き、草の根的な女性団体は存在しなかった。

ベルリンの壁崩壊に伴い、西欧や北米との自由な往来が可能になったことで、ジェンダーの概念やフェミニズムの理論がチェコにも流入した。欧米のフェミニストたちとの邂逅を通じ、人文社会科学系研究者たちは自国のジェンダー研究を始動させた。中でもパイオニア的存在だったのは、社会学者のイジナ・シクロヴァー（Jiřina Šiklová）である。シクロヴァーの自宅には国内外から女性研究者たちが集い、議論が交わされた。

1992 年には、シクロヴァーの私邸に非政府・非営利組織のジェンダー研究センター（Gender Studies, o.p.s）が創設された。主に米国の大学から寄贈を受けながら、センターには図書館も整備されていった。1994 年に独立したセンターの積極的な活動は、プラハのカレル大学やブルノのマサリク大学への、学術分野としてのジェンダー研究の導入にも寄与した。現在はダンシング・ハウス近くの、マサリク河岸通りに面したアパルトマンに居を構えている。シクロヴァーの名を冠したその図書館は、中東欧地域のジェンダー研究に関する文献が充実しており、センターが独自に調査・発行した書籍も置かれている。

欧米のフェミニストたちとの交流は、チェコのフェミニストたちが、自国の女性たちの置かれた社会的状況が欧米のそれとは著しく異なっていることに気づく契機ともなった。欧米の第二波フェミニズムでは、男女雇用機会均等や中絶の合法化などが中心的議題であった。ところが社会主義圏では、労働参画による女性解放がイデオロギーとして掲げられており、女性の労働参画率は非常に高かった。また人工妊娠中絶もチェコでは 1957 年の時点ですでに合法化されており、差し迫った問題とはなりえなかった。

他方で経済の自由化が進み、チェコ社会でも欧米社会に類似したジェンダー問題が浮き彫りになってきた側面はある。例えば、表面的な様相は異なれど、職業上のジェンダー差は顕著である。チェコの場合、日本では男性的職業とみなされがちな医師に占める女性割合は低くないが、それは工業化を推進していた社会主義時代に男性的職業としてブルーカラーが高給取りであったことの裏返しである。

旧社会主義圏における今日のジェンダー研究では、社会主義期以前の歴史の見直しが図られる一方、自由化を経て EU に加盟した現在の社会について複数のトピックから横断的に分析する研究群が増えている。そのうち英語で読める文献について、前者では、Francisca De Haan 他編の *A Biographical Dictionary of Women' s Movements and Feminisms*（2006 年）や、Zsófia Lóránd 他編の *Texts and Contexts from the History of Feminism and Women' s Rights*（2024 年）がある。後者なら、Katalin Fábián 他編の *The Routledge Handbook of Gender in Central-Eastern Europe and Eurasia*（2021 年）が挙げられる。

本邦では中東欧地域に着目したジェンダー研究が寡少だが、いわゆる第三世界とも欧米社会とも異なる歴史的文脈に位置付けられた同地域に目を向けることは、ジェンダー研究の理論的発展のために重要であろう。筆者は現在、有志十数名とともに「中東欧フェミニズム読書会」をオンラインにて開催している。目下、地域研究や歴史研究を専門とする参加者が多いため、ジェンダー研究からも興味を持って読書会に参加してくれる方がいると大変嬉しい（問い合わせはこちら：murase-yasuna827@g.ecc.u-tokyo.ac.jp）。

ジェンダー研究センターで入手した書籍。（左）*Ženy 60+*（中）*Hnízdo feminismu: 30 let Gender Studies*（オンラインで入手可：https://cz.boell.org/sites/default/files/2021-12/gs30_dvoustrany.pdf）（右）*Všechny naše včerejšky II: Paměť žen*。

事業報告

2024 年度賛助会員のつどい（公開）報告

映画『八十七歳の青春 ―市川房枝生涯を語る―』上映と解説

解説　佐藤ゆかりさん

11 月 16 日名古屋国際センターにて開催の賛助会員のつどいは、2024 年が「婦人参政権獲得期成同盟会」の創立 100 周年に当たることを記念して、婦人参政権獲得に尽力した市川房枝さんのドキュメンタリー映画『八十七歳の青春』（1981 年製作・公開）の上映会となりました。奇しくも、前年のつどいがアメリカのバーバラ・リー下院議員の不屈の闘いを描いた『権力を恐れず真実を』の上映会であったということで、日米の比較も時に思い浮かべながらの感動的な午後となりました。

上映に先立って、三重の女性史研究会会長の佐藤ゆかりさんから映画の解説をしていただきました。映画が 2 時間もの長さなので、解説は短くお願いすることになりましたが、巧みに要点を押さえユーモアも交えた解説で、素晴らしい導入となりました。「婦人参政権はマッカーサーの贈り物ではなく、市川ら日本の婦人たちが闘って勝ち取ったもの」というお話に嬉しくなったり、「政治腐敗や金権政治の打破をめざす市川の姿勢」は、まさしく今日的な問いかけそのものであると怒りで胸が一杯になったりして、あっという間の 30 分でした。

映画は、若い女性たちに市川さん自身が己の人生を振り返りつつ語りかける手法で、間にその時々のドキュメンタリー・フィルムが挟まり、半世紀近い年月を経たものですが、男女平等に懸ける市川さんのまっすぐで強い志にとても心を揺さぶられるものでした。

話は前後しますが、会場は当初 60 名の予定でしたが、観客は 100 名をゆうに超える規模になりました。例年の賛助会員のつどいでは、講師との質疑応答や会員同士の意見交換の時間をとっていましたが、今回は上映時間との関係で、最後のその時間を割愛せざるを得ませんでした。とはいえ映画終了直後は、皆一様に様々な思いが胸

に込み上げてきて、しばし言葉を失っていましたので、これもありかなと思いました。そのせいもあってか、映画を見終わった皆さんは、思いのたけをアンケート用紙にお書きくださって、東海ジェンダー研究所のイベントとしては異例の量になりました。

もう少し映画会開催の背景を加えますと、東京の「（公財）市川房枝記念会 女性と政治センター」の林陽子理事長には、LIBRA 80号に巻頭言をお寄せいただいていますし、2021 年度にはご講演にお越しいただいています（LIBRA 74 号参照）。本映画会の前週 11 月 8 日に名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリは「市川房枝と郷土愛知」と題したシンポジウムを林理事長と同センターの枝松栄さんらをお迎えして開催し、翌 9 日にはウインクあいちで「議会はあなたを待っている」を本研究所との共催事業として開催いたしました。

市川房枝ゆかりの愛知県を拠点とする本研究所は、今後も東京のセンターとのつながりを大切にしていくつもりです。「権利の上に眠るな」という市川の言葉を胸に、婦人参政権獲得 80 周年となる 2025 年を、皆様と共に実り多き年にしたいものです。

小川 眞里子（東海ジェンダー研究所理事）

参加者のアンケートは
裏面をご覧ください。

INFORMATION

参加者のアンケートから

賛助会員のつどいに寄せられたたくさんのアンケートの中から、一部抜粋してご紹介させていただきます。

暖かさと熱意のこもった市川房枝氏の一つ一つの言葉が心にしみ、元気をいただきました。率直なお話に、信頼のおけるすばらしい方だと思いました。コツコツと積み上げられてきた活動が今日の女性向上につながっていることがわかり、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

学生時代の勉強会で名前しか知らない市川房枝の生の姿や声を見て、日本の婦人参政権の実現までの道のりをすごく身近に感じました。

働く婦人が疑問をもち声を上げるということが難しかった時代においてたえず、問題意識をもち、婦人の地位向上のみならず日本政治の方向を見定め、行くべき姿について固い決意をもって臨まれた市川房枝先生の活動やその考えを広く情宣し、今後の日本の指針として様々な行動の源となるように日本の平和を守る小さな一端を担いたいと思いました。

市川さんの生涯にふれて、感激しました。彼女のメッセージが今日にも全く同じであることに驚き、そして残念でもあります。でも、世界中から侵略をなくし、核兵器がなくなるまで、行動しようと勇気をもらいました。映画ででも、市川さんにあえてよかったです。

市川房枝さんについては余り知りませんでしたが、母が幼い私をおぶって市川さんのデモに参加したという話を聞いていて親しみを持っていました。初めてその活動について知り、とても素晴しいお人柄とともに信念を貫き通した方だと感動しました。40 年前と現在の日本が変わっていないことに憤慨すると共に私達の責任もあると実感しました。

お知らせ

2025年度 個人・団体研究助成 募集

2025年度の個人と団体の研究助成の希望者を募集します。
対象はジェンダー問題に関する未発表の研究で分野は不問。助成費は個人50万円以内、団体10～30万円。申請書はホームページからダウンロードしてください。
申込期間は2025年4月15日（火）～5月31日（土）。
申請はメールで受け付けます。詳しくは、ホームページをご覧ください。

『ジェンダー研究』第28号の原稿募集のお知らせ

当研究所の年報『ジェンダー研究』第28号の原稿を募集します。
メインテーマは前号に引き続き「女性と労働」としますが、その他のジェンダーに関連するテーマも可です。
原稿の締切日は、2025年9月30日（火）。
応募はメールで受け付けます。詳しくは、ホームページをご覧ください。

お詫びと訂正

前 82 号の 3 ページ「個人助成受託者報告会」報告の左段 20 行目。
「サンクトペテルブルク」は、「ポーランドのクラクフ」の誤りです。
お詫びして、訂正いたします。

賛助会員を募集しています。

賛助会費　年間　一口　1,000円
振 込 先　郵便振替口座　00820-0-77338
公益財団法人東海ジェンダー研究所
（振込手数料は当方負担）

他行からお振込みの場合
銀 行 名　ゆうちょ銀行
店　　名　〇八九
預金種目　当座
口座番号　0077338
（振込手数料はご負担ください）

＊会員の皆様には当研究所の年報『ジェンダー研究』やニューズレター『LIBRA』、講演会などの事業のご案内をお送りします。
＊当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及び寄付については税法上の優遇措置があります。

編集後記

消化器外科医の世界にもガラスの天井があり、それを打ち破ろうとしている人々がいることを初めて知りました。かつて社会主義だったチェコのフェミニズム研究の道筋も興味深いものでした。「賛助会員のつどい」では市川房枝さんの姿に心を新たにしました。ご参加頂いた皆様、ありがとうございました。

LIBRA
公益財団法人　東海ジェンダー研究所
〒460-0022　名古屋市中区金山1-9-19　ミズノビル6F
ＴＥＬ　052-324-6591　ＦＡＸ　052-324-6592
E-mail　info@libra.or.jp　https://libra.or.jp/